

\*\*\*\*\*

## クリー語との再会

廣瀬 富男

2012年度は、在外研究ということで、カナダはバンクーバーに来ている。昨日（12月19日）は大雪で、受け入れ先のブリティッシュ・コロンビア大学も、当日の期末試験をすべて年明けに延期し、休校となった。2010年に冬季五輪が開催された都市ではあるが、雪はあくまでも周囲の山々に降るのであって、フレーザー川の河口に開けたこの街が雪に包まれるのは、年に数えるほどでしかない。果して、市民も交通機関も雪に弱いのである。

さて、卒業以来十数年ぶりにこの街に戻ってきた目的の一つは、博士論文で研究対象としたクリー語の場所格前置詞句を調査することである。学生の時、本来内陸のアルバータ州やサスカチュワン州の言語であるクリー語の母語話者を西海岸のバンクーバーで見つけるところから始めたが、今回は、大学院時代の指導教授でもあり言語学科での保証人でもあるディシェイン教授の好意



アパートの窓から大学方面の雪景色

により、クリー語の情報提供者として彼女の下で働いている女性と仕事をすることができた。

この女性は、フランス系白人とクリー両方の血統を持つ、いわゆる「メイティー（métis）」である。このような背景を持つ彼女の基本語彙には latáp（テーブル）や labwèt（箱）等、フランス語起源の単語が散見され、興味深い。ただ、彼女の場合、

クリー語との接触が祖母と過ごした幼年期に限られるため、自由に扱える語彙は決して多くなく、なかんづく前置詞が少ないので、前置詞句の振る舞いを調べたい筆者としては、データ収集に骨が折れた。尤も、彼女にしても、一度につき90分間程度、時に要領を得ない英語を口にする筆者と遣り取りしなくてはならないわけで、それはそれで大した骨折りだったと思う。

そんな彼女との聴き取り調査も、回を重ねるごとに自然と和やかなものになり、調査開始の5月から彼女の契約が切れる11月末までの間に約20回を数えたが、筆者にとって最も衝撃的な瞬間は、意外にも早く、2回目の調査時に訪れた。

「Which bed was she hiding behind? って、クリー

語でどう言うんですか？」

「tānima nipêwin nāway kâ-kâsôt? (Which bed behind was.she.hiding)」

「えっ、どうして前置詞も前に行くんですか？」

「そんなこと知らないわよ」

因みに、対応する平叙文は、ê-kâsôt nāway nipêwinihk (She.was.hiding behind bed.Loc)である。

以後、場所格前置詞句に関わるWh疑問文を中心にデータ収集を続け、その結果を10月末にシカゴ大学で開催されたアルゴンキアン学会で発表した。そして、発表内容をまとめた論文の初稿を、アパートの窓の向こう、雪の白く静かに降りつもった師走の午後に書き終えたのである。

\*\*\*\*\*